

勝林寺寺報

譬如日光覆雲霧



勝林寺のある豊岡市は霧の深い地域です。その発生は世界でも一、二位を争うほどで、「霧の町ロンドン」に勝るとも劣らないのだそうです。また最近では、近隣の朝来にある竹田城の雲海が天空の城・日本のマチュピチューとして、多くの人が観光に訪れています。私たちにとって今「霧」は自然の観光資源として大いに役立っています。

この霧が仏教のお話の中に用いられるとき、決して良いものとしては扱われないようです。

私たちの日常生活の中でも、普段はあまり喜ばしいものではありません。朝いつまでもうす暗く、じめじめと、車の運転でもとても厄介で困ります。

それでも、光を遮るこの煩惱の霧は、私たちの生活中では白く美しく、シルクを育む愛しい「キリ」なのです。子どもたちにもこの出石の自然の豊かさ、美しさを教えてやろうと、多くの人たちが今頑張っています。その一環で、数年前からミニティーの方々が霧の発生しやすくなる十月から十一月にかけての日曜日、子どもたちや、町の人たちに呼び掛けて出石城のある有子山の早朝登山を始められました。有子山は三百二十二メートルの山。まだ薄暗い朝

の七時ころから登りだします。三十分も登ると急速に明るくなってきて、山城の城壁跡の頂上に立った時は燐燐と太陽の光が降り注いでいます。そして下を見ると、街の姿は何も見えず、ただ真っ白な大海原が果てしなく続いているのです。ひと時山頂で暖かい陽を浴びながら休憩して、ゆっくり下山します。そうするとだんだん

また薄暗くなり、朝、みんなが集まつた場所に降り、解散する九時頃には、また出発の時と同じ薄暗い霧の中なのです。この不思議な美しい自然体験を多くの人たち、そして多くの子どもたちに見てもらいたいと思います。「譬如日光

覆雲霧 雲霧之下明無闇」(たとえば日光の雲霧に覆はるれども 雲霧の下明らかにして闇なきが)とし) どうたわれたその姿が、自然の実体験の中でよくわかつてきます。

日の光にいかに厚い雲や霧がかかつても、雲や霧の上にはしっかりと太陽の光が注いでおり、夜はすでに明けているのだということです。日光を信心にたとえ、霧を煩惱にたとえ、雲海の下を私たちの日常の暮らしにたとえられているのです。

信心を得るならば、すでに無明の夜が明けたのだから、どれだけ厚い煩惱の雲がかかつても、その雲の下は明るく、浄土に向かう道を間違えることのない確かな人生生活が開けてくる。信心を得るならば、すでに無明、迷いの世界を超えて生きて行くのだというわけです。

秋になつたら、ぜひ一度、有子山早朝登山をしてみてください。竹田城に勝るとも劣らない素晴らしい雲海が見られます。(文責 住職)

秋彼岸会のご案内

今年は、とりわけ残暑が厳しく、秋の訪れが恋しい毎日です。それでも、赤トンボが飛び、夜には、虫の声も聞かれるようになります。もうひと段階で秋の到来です。彼岸会にお参りください。

日時 九月二十三日(日曜日)

午後二時より

内容 正信偈お勤め
法話(当山住職)

三日(木)
兵庫教区 総代ブロック研修会
(但東町 やまびこ)

前住職一周忌法要

早いもので、前住が往生いたしまして、もう

じき一年が経とうとしています。この間、ご門徒の皆様、有縁の皆様には、多方面から勝林寺

をお支えいただきましてありがとうございます。

お陰様で、一周忌を勤めさせていただく運びとなりました。(ご案内いたします。

日時 一〇月六日(土曜日)

午前一〇時より

一六日(日)
数森美咲子宅 七回忌
一七日(月)
初田一三宅 三・七回忌

合同役員会
三〇日(水)
みのりを開く会
三〇日(木)
真覚寺 繼職法要

日時 一三三日(日)
秋彼岸会

内容 お勤め
法話
食事会

(敬称略)

九月 勝林寺 予定

一日(土) 田中啓二宅 一周忌法要

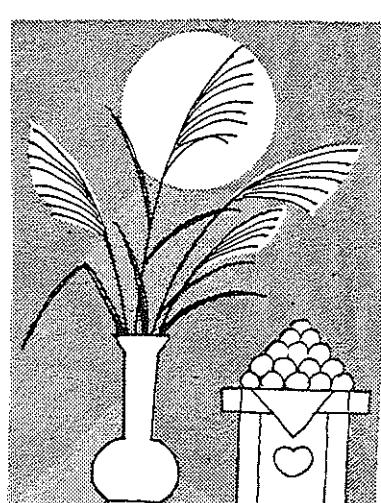
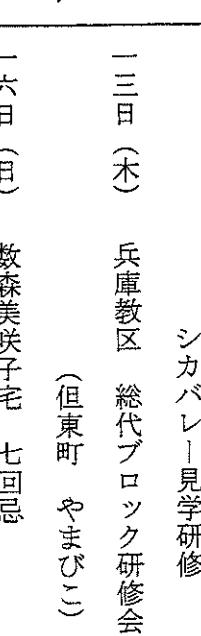
三日(月) 出石組 連研委員会

七日(金) 兵庫教区 公聴会

一〇日(月) 出石組 連研(光頭寺)
シカバレー見学研修

九日(日) 龍谷大学臨床心理学科

一日(土) 田中啓二宅 一周忌法要
三日(月) 出石組 連研委員会
七日(金) 兵庫教区 公聴会
一〇日(月) 出石組 連研(光頭寺)
シカバレー見学研修



その他・法要へのお参りはどなたでもしていただけます。昼食につきましては、総代様、仏事仏婦法輪会役員様、各地区代議員様とさせていただきますことを、ご了承ください。(ご案内は別途)

法要に際しまして、各戸より千円のお供えをお願いいたします。後日、代議員様に集めていただきます。

疑似宗教の流行

最近、ちまたでは「千の風」といううたがはやっています。西本願寺でも、それをいさかアレンジしたCDを作つて販売しているほどです。その歌詞の内容は、「私はお墓の中にはいません」「千の風になつてかけめぐつては鳥になつて飛んでいる」「夜は星になつて光っている……」というものです。しかし仏法、真宗では、私たち人間は、死んだら仏になるか、さもなくば迷界の六道に流轉するか、そのどちらかであると教えてきました。だが現代人は、そういう、教えを学ばなくなつたから、人間が死んだらどうなるのか全く分からぬわけです。しかし現代人は、伝統の仏法は棄てたけど、現実に身近な人の死にでかい、あるいはまた、自分の死という問題を思うときには、人間が死んだらどうなるのか全くわかりません。だから人々は、もう一度、宗教、心の世界にもどらざるをえないわけですが、多くの人々は、正しく仏法を学ぼうという思いがないところから、勝手に、自分で宗教らしきものを考へ出でて、それで自己満足しているのです。いま「死んだら風になる」「朝は鳥になる」「夜は星になる」というのは、まさしくそういう疑似宗教によつて考へ出したところの、たわいない自己満足にはなりません。

最近のテレビの番組においても、どこかの占い師のおばさんが、他人の人生問題を最もらしく解説し、無責任な助言を語つて、大方の人気をとり、またスピリチュアル何とかといふ、いかがわしいタイトルをつけて、オーラが見えるとか、守護霊をもつとかいつて、現代人の悩みに対応し、視聴率を上げているなどは、この様な疑似宗教の今日的現象にほかなりません。現代では、そういう疑似宗教がちまたにあふれて

います。書店に行くと、それに關わるような本が、「精神世界」というコーナーにたくさん並んでいます。それは全く以て非なる宗教ですが、現代人はそういうところで、自分の心の空白を埋め、その癒しを求めているわけでしょう。

どうしてそういうことになったのか、何よりも伝統の宗教、仏教がその責任と能力を喪失しましたからです。もともと仏になることを教えるは死の西本願寺までが、「死んだら風になる」という歌を唄わせているほどです。

しかしながら、まことの真宗の教えとは、人間一人ひとりが、仏になることをめざして生きていこうことを明かすものです。どうぞ迷うことなく、いつそう心して仏法を学んでください。

(2008.8)

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)



まことの信心の人とぼ 諸仏とひととむかうすなり

法語カレンダー九月

どすん

暑い中、忙しい中にもかかわらず、多くの有縁の方にお集まりいただき、前住の喜んでいた顔が横に納め、前住の喜んでいた顔がいたしました。前坊守のお骨のが存じない方がありますので、参考までに、おたからです。もともと仏になることを教えるは死の西本願寺までが、「死んだら風になる」という歌を唄わせているほどです。

今月の言葉は、お手紙（御消息）にある「文阿弥陀さまのお心を、その如くにうけとめることができたからといって、その人の煩惱がなくなるわけでも、減っていくわけでもあります。けれども、娑婆の縁が尽きた時に、お淨土に往生する」とが間違いないとわかり、仏さまにならせていただくその時です。

阿弥陀さまのお心を、その如くにうけとめることができたからといって、その人の煩惱がなくなるわけでも、減っていくわけでもあります。けれども、娑婆の縁が尽きた時に、お淨土には「無量寿」と書かれた石碑があります（その地下が納骨堂となつており、近年、多くの方のお骨が納められています）。そのさらに本堂側たくさんの木々に囲まれた中に「南無阿弥陀仏」と書かれたひときわ大きな石碑があります。これは、「まことの信心の人」とあらわされています。この「まことの信心の人」が、「諸仏とひとし」と讀嘆されるのです。最高の言葉でほめたえられるのです。

けれども、私たちが注意しなければならないことがあります。「まことの信心の人」が「諸仏である」とはおっしゃつていません。「まことの信心」といえども、煩惱を具足している凡夫であることはかわりはありません。煩惱具足の凡夫は、けつして眞実清浄な仏さまと同じではありません。煩惱のかけらも混じらない、眞実で清らかな存在が仏さまです。

今月のことばにある「まことの信心の人」は、阿弥陀仏の大いなるお心に出遭つことができた方です。亡くなると、必ず阿弥陀さまのお淨土に往生して、必ず仏となさせていただけることにはかわりはありません。煩惱具足の凡夫は、この方を、臨終を待たずに、仏に等しいといふ最大級の讀辭をもつて讀えるのです。

(「月々のことば」より抜粋)

暑い中、忙しい中にもかかわらず、多くの有縁の方にお集まりいただき、前坊守のお骨のが存じない方がありますので、参考までに、おたからです。もともと仏になることを教えるは死の西本願寺までが、「死んだら風になる」という歌を唄わせているほどです。

想像され、ほつとしました。ところで、勝林寺のご門徒さんでも、意外にお墓がどこにあるかお知らせします。勝林寺の山門を入つていただくと、すぐ右手に鐘楼があります。その登り口前には「無量寿」と書かれた石碑があります（その地下が納骨堂となつており、近年、多くの方のお骨が納められています）。そのさらに本堂側たくさんの木々に囲まれた中に「南無阿弥陀仏」と書かれたひときわ大きな石碑があります。これは、「まことの信心の人」といわれています。前住が、力を注いでいた法務のトップは、やはり寺報の発行だったと思いますが、次に往生する」とが間違いないと分かる方を、「まことの信心の人」とあらわされています。この「まことの信心の人」が、「諸仏とひとし」と讀嘆されるのです。最高の言葉でほめたえられるのです。

けれども、私たちが注意しなければならないことがあります。「まことの信心の人」が「諸仏である」とはおっしゃつていません。「まことの信心」といえども、煩惱を具足している凡夫であることはかわりはありません。煩惱具足の凡夫は、けつして眞実清浄な仏さまと同じではありません。煩惱のかけらも混じらない、眞実で清らかな存在が仏さまです。

今月のことばにある「まことの信心の人」は、阿弥陀仏の大いなるお心に出遭つことができた方です。亡くなると、必ず阿弥陀さまのお淨土に往生して、必ず仏となさせていただけることにはかわりはありません。煩惱具足の凡夫は、この方を、臨終を待たずに、仏に等しいといふ最大級の讀辭をもつて讀えるのです。

暑い中、忙しい中にもかかわらず、多くの有縁の方にお集まりいただき、前坊守のお骨のが存じない方がありますので、参考までに、おたからです。もともと仏になることを教えるは死の西本願寺までが、「死んだら風になる」という歌を唄わせているほどです。